



【ラオス】



レポーター
安井 清子 さん
(やすい きよこ)

▼水牛と山の子どもたち



▲町の子ども文庫



▲山村の兄弟

ラオスで暮らす……子ども図書館とともに

ラオス周辺に関わり25年

皮切りは、SVA(シャンティ国際ボランティア会)の活動に参加して、5年間、タイの難民キャンプでモン族(ラオスの山岳地帯に住む民族)の子どもたちのための図書館を立ち上げる活動だった。その後、再びSVAのラオス図書館担当として2年ほど派遣された。

モンの村に図書館を

ラオスの山の村に暮らすモン族の民話を記録しようと村に出入りするうちに、2年間近く村に滞在することになった。私は建設作業が進む横で、ゴザを敷いて子どもたちに絵本を見せ、モン語でお話をしたりして、身を持って「図書館とは何をするとするか」を示しながら図書館づくりを手伝った。

はじめての山村生活

この時はじめて、山の村の生活を長期に体験した。電気も水道もなく、昼間、大人たちは畑仕事で山へ出払ってしまう。子どもたちも水くみや薪とりなど家の仕事がある。私自身は薪に火もつけられず、天秤棒もうまくつかげず……自分の身一つではいかに何もできないかを思い知らされた。不便この上ない生活である。しかし、それだからこそ、小さな頃から自分で何でもやることで身につく力の大きさ、大切さを思い知った。

ラオス人と結婚

さて、ずっとモン族一辺倒で、ラオスに関わってきた私であるが、3年ほど前に、ラオス人と知り合い結婚した。現在、首都ヴィエンチャンの町はずれに住んでいる。親戚たちがみんなで建ててくれた家に住み始めたものの、結婚した当初は、結構つらかった。人が大勢出入りして、にぎやかなのが大好きなラオス人たちの中で、私は、「いかにプライベートを守るか」に必死になった。近所の子どもたちが家を覗くのまでもが嫌だった。「山の村では、私が他人の家に受

け入れてもらい、他人と一緒に暮らしてきたのに、どうして、自宅となるとそれが嫌なのか？」と自分で思い悩んだりもした。

け入れてもらい、他人と一緒に暮らしてきたのに、どうして、自宅となるとそれが嫌なのか？」と自分で思い悩んだりもした。

子ども文庫を開設

そこで、自宅横で子ども文庫を開くことにした。夫が、茅葺屋根のあすまやのような建物を作ってくれ、土日にオープンしている。文庫を開く日には、朝から子どもたちがやってくる。この辺りは、どちらかというと貧困層の子どもが多い。学校には行っているが、図書館には行つた



▲町の子どもたち

ことのない子どもたちである。みんな、あたかも「自分の場所」というような顔をしてやってくる。山の子どもたちは、水くみややら畑仕事やら、家の仕事で結構忙しく、1日中図書館にいる子は少なかったが、ここの子どもたちは、本を読んだり絵を描いたりと1日中べったり居座っている。ただその分、大きな子どもたちが中心になって、遠足に行ったりクリスマス会を開いたりして、活動の幅も広がってきた。閉館日でも、「きよこ～、遊びに来たよ」と子どもたちに呼ばれ、プライベートを守るところではないが、地域の問題も少しずつ我がこととして考えられるようになってきた。

山にも町にも図書館

山の村、町……違う環境で、それぞれの子どもたちに合った「居場所」「図書館」となればいいと思う。今後は、町の子どもたちと山の子どもたち、そしてできれば、日本の子どもたちも交えて何かができたらいいと思う。実際に知り合い、友だちになり、一緒に時間を過ごし、他人事ではなくなるころから、何かが始まると思う。

(文・写真提供:安井清子)